



「潟」の記憶

—潟と共に生きる人々の物語—



昭和20年代以降、水田の乾田化、潟の干拓がすすみ、新潟市における潟端の暮らしは大きく変わった。潟の動植物を生活の糧とする世代が高齢化し、潟と共に歩んできたその記憶は失われつつある。

この『「潟」の記憶—潟と共に生きる人々の物語—』は、潟と共に暮らし、生業としてきた人々が、その経験を語る記憶集である。



「潟」の記憶 —潟と共に生きる人々の物語— (2016年3月)

撮影協力 (個人) 青柳一男 / 大野彦栄 / 金子勲 / 小林正芳 / 齋藤一雄 / 佐藤了 / 田中保夫 / 長谷川哲夫 / 増井勝弘 / 松原アキミ / 松原昇平 / 松原ヨミ / 丸山稔 / 森田忠夫 / 横山愛子 / 横山フヂノ
 (団体) 赤塚漁業協同組合 / 上堰潟田舟の会 / 新鼻甲自治会 / 鳥屋野潟漁業協同組合 / 新潟市歴史博物館
 写真提供 (個人) 石田博道 / 小林昭栄 / 斎藤文夫 (団体) 亀田郷土地改良区
 制作・著作 新潟市潟環境研究所 制作協力 株式会社電通東日本

「潟の記憶」は、視聴覚資料を取扱う市立図書館でDVD版(貸出可)をご覧いただくか、公式ウェブサイト「潟のデジタル博物館」にてご覧いただけます。

(図書館名: 中央図書館・豊栄図書館・白根図書館・新津図書館・西川図書館・亀田図書館・坂井輪図書館・生涯学習センター図書館・月潟図書館・岩室図書館・巻図書館・潟東図書館)



潟の記憶

潟と人の関係は、近代化とともに希薄になったが、今も脈々と生きている。

この「潟の記憶」は佐潟、上堰潟、鳥屋野潟、福島潟の潟端に暮らす人々へインタビューし、潟での漁や採集活動を記録したものである。今後の「里潟」復活への一助となれば幸いである。

— 潟環境研究所 所長 大熊孝

トッコウ網漁は時間勝負—

《佐潟での「潟」の記憶より》



新潟市西区赤塚に位置する佐潟では、盆にハスの花とりが行われる。佐潟で収穫されたハスの花や、地元の人が「トバス」と呼ぶ花托は、地元の商店や近隣のスーパーで販売され、仏花として、墓前や仏壇に供えられる。

舟漕ぐのなんて自然でした—

《鳥屋野潟での「潟」の記憶より》

中央区の鳥屋野潟南部に清五郎という地区がある。かつて、清五郎の集落には集落を貫くように鳥屋野潟と清五郎潟をつなぐ川が流れていた。その川は集落の暮らしと密接にかかわっていた。かつては、生活用水や飲み水として川の水を使っていた。また、収穫した稲などを運ぶ水路でもあり、周辺の田で刈り取られた稲は、川端にあったハサ木にかけて干すために、舟で運んだ。

「舟漕ぐのなんて自然ですわ。歩くと同じ」と語る、清五郎地区の松原昇平さん（大正14年生まれ）。

昭和23年に栗ノ木川排水機場ができる以前、清五郎川、鳥屋野潟、栗ノ木川を舟で漕いで移動した経験がある。



清五郎在住 松原昇平さん

鳥屋野潟の撮影では、鳥屋野潟漁業協同組合の協力で、かつて鳥屋野潟、清五郎潟で行われていた投網、刺網、オウギアミを用いた漁法を実演してもらい、それを撮影した。



赤塚漁業協同組合 青柳一男さん

戦後、赤塚漁業協同組合が発足した当時の組合員、青柳一男さん（昭和7年生まれ）に話を聞いた。現在では舟で佐潟に出ることはなくなりましたが、佐潟でのハスの花とりや冬場の漁に長年、携わってきた。青柳さんは農家であるが、冬場の時期には漁で収入を得ていた。

「トッコウ網」と呼ばれる円錐形の網を使って漁をしていたという青柳さん。このトッコウは一人で行う漁、腕次第で多くの魚がとれた。魚が呼吸する穴を水底に確認すると、トッコウ網をかぶせ、網の中にタモ網を入れて魚をすくう。「魚に



トッコウ網

投網や刺網はある程度の大きさのあるコイやフナを狙い、オウギアミは雑魚をとるために用いた。現在では、鳥屋野潟で漁をする人は数人になったが、自家用にとるほか、地域の催しでコイやボラ、スジエビなどが食されている。



追い込み漁（扇網）

気づかれないようにタモをいれてとることが難しい。また、トッコウは「時間勝負」。午後の1時以降はまったくとれなくなった」という。11月になると佐潟での漁がはじまる。近年では、数人で協力して行う地引網漁が主流となったが、漁師たちの冬の楽しみとして続けられている。



宝になると思ったから—

《上堰潟での「潟」の記憶より》

角田山のふもとに位置し、現在では多くの人々が訪れる憩いの公園となった西蒲区の上堰潟。その水はかつて、農業のかがい用水源として利用されていた。そして、潟の周辺に広がる田で農作業をするためにかかせないものがあった。それは「田舟」である。

9月、上堰潟田舟の会が、潟に新しい田舟を浮かべるといので、その様子を撮影させてもらった。

みんなたまげたね、二束も担いで—

《福島潟での「潟」の記憶より》

北区にある市内最大の潟、福島潟。かつて、潟端の集落の女性たちが、ヒシの実を収穫し、市（いち）に出すなどして、収入を得ていた。

9月、現在も行われているヒシの実際の収穫を撮影した。ヒシの葉が茂る水面に手を伸ばし、葉をつかんで裏返す。そして、ひとつずつ実をもぎとる。



潟端の新鼻甲に暮らしてきた横山フジノさん（大正14年生まれ）は、「ヒシもぎやヨシ刈りをして家計の足しにしていた」という。

ヨシ刈りは入札で、刈る場を決め、下草を手で落としながらヨシだけを両手で抱えるほどの束にしていく。

「上堰潟は格好の遊び場だった」と語る、上堰潟田舟の会の齋藤一雄さん（昭和20年生まれ）。



上堰潟田舟の会 齋藤一雄さん

子どものころ、農作業用に係留してある舟を拝借して遊ぶのが楽しかったそうだ。齋藤さんが「宝になると思って残しておいた」という田舟は、イベント時や地元の小学生向けの乗船体験で利用されている。



新鼻甲在住 横山フジノさん

横山さんは、自分の背丈よりもはるかに高いヨシの束を頑張って運んだときは、さすがに驚かれたそう。よきときで、一日に30束ほど刈ったというヨシは、良い収入になったという。ビュー福島潟「潟来亭」の管理人で福島潟の潟端に暮らす、佐藤さんと長谷川哲夫さんは、現在でも福島潟で漁をしている数少ない「漁師」だ。

福島潟とつながる新井郷川で川ガニをとった話、かぶせ網を使い、フナなどの魚をとっていた話を聞かせてくれた。潟では、かつて簀立てをたてて、本格的な漁も行われていたという。福島潟の干拓が終わる昭和40年代以降、漁に出る人は少なくなった。

しかし、近年では、地元の新鼻自治会が、地域の行事やイベントの場で、福島潟でとれたヒシやハスの実、雑魚や川ガニなどの潟の食材を使った料理を振る舞う活動に取り組んでいる。

